

学校物語 (国吉小の巻18)

— 筆をおくに当つて —

鈴木幸助

この学校物語は夷隅町新聞に編集上の余白が生じた場合、その埋め草につかつつてもらつてもよいと考え、当時の高橋編集長と相談の上「鈴木令一」のペンネームで書き出したものである

編集者の注

文はなるべく無味にならないようにしよう

学校という性格から面白く読ませるといふことはむづかしい、私の及ぶ所ではないが、それはとにかくとするも編集者はこんなに長い続きものになろうとは思つていなかったらしい。当の私でさえ五回か六回で片づけるつもりでいたものだ。それが二回、三回と回を重ねていくうちに意外に多くの読者があることを知らされ、急に予定を変更して興のおもむくままペンをはこんでしまったのがこれである。

どこの学校にも公式的な学校記録というものはある。それは単なる行事名とその年月日をするすに止まつているようである。このようなものはそれがどんなに古かろうと、焼失しない限り永遠に保存される筈だ。しかし記録されないもので古老の人達がそのむかし見聞したものは、今にして書きとめておかなければ後世に残すす

を失つてしまうこととなる。これを機会としてその役をいくらかでも果たしてみようかと、少々大それた野心にとらわれてしまったのである。

ところがいままでの読みかえしてみると、明治三十五、六年までで既に十六の回を数えているしまつて、この分では一生かかつて書き終えそうもないのに気がつき、浪花節の文句ぢやないけれど、「余りおながくなりますのでちよつと一息いれまして、またのご縁とおあづかり」てなことになつた。従つて吉野校長に関する記事もお三回分をホゴにしてもらうことにした。

一般的な学校物語としては、そのむかしの先生や生徒の服装、或いは運動会、遠足等の風景等々にも描写のペンを延ばしたかつたし事実、之等については絶えず食指をうごかしていたものだつたが、わずかに国吉町名の由来だけを間載したにすぎなかつた。

あれや、これやを思うときこんなに長く連載したにも拘わらず、書きもらしたものに多小の心のこりがないわけではなかつた。今後また何等かの機会があれば、タンポの落穂でもひろうつもりで補足したいと思う。なお本橋執筆に当つては先輩たる大曾根九一先生、麻生とり先生、並びに吉野一松先生とり先生の御令嗣に当る吉野一雄さんに御世話になつたことを特記し深甚なる謝意を表したい。また終始ご愛読下さつた町民の皆さんに厚く御礼申し上げたいのであ